

書評

岡田俊裕 : 地理学史—人物と論争

古今書院, 2002年, 227 p.

千歳 壽一

地理学史と聞くと、19世紀ごろのドイツの学者の地理学本質論に関する難解な議論などを思い浮かべて、敬遠する人が少なくないようである。そのことは、本書の著者も心得ているようで、まえがきに「地理学史のおもしろさを伝えたくてこの本を書いた」と記している。

半信半疑で読み始めたところ、眼が離せなくなり最後まで読んでしまった。日本の近代の地理学はこうして始まり、それが様々な変化を経て、今見ている現代に続いているということが、地理学史から縁遠い者にも、特別な緊張感を伴うことなく、理解することができた。少なくとも、理解した感じをもつことができた。日本の地理学史なので、お名前をよく聞く偉い先生に関する話であり、その意味では親しみがもてる。特に、お茶の水地理学会が創設されるための基盤を形成された、いわばお茶の水地理学会の祖先のような先生がたのご業績を知ることができて、親しみが深まる。

本書の構成は、大きく第I部地理学史上の人物と業績と第II部地理学論争史に分けられている。第I部では、1880年代から1960年ごろまでの約70年間、時代区分が行われて、時代を代表する人とその業績が紹介されている。第II部は、かつて地理学界で行われた有名な論争についての要約整理とその一覧である。

本論に入る前に、まず時代区分が示されている。4人の先学者の区分とともに、著者による時代区分について述べられている。

第I部は、著者の時代区分に従って5章から構

成されている。第1章前アカデミーの時代では、日本の近代地理学の開拓者である小藤文次郎の論文を掲載した地学雑誌が東京地学協会の会誌として創刊された年、1889年を、日本の近代地理学が始められた年としている。第2章アカデミー地理学の形成は、—大学の地理学教室が整う—という副題のとおり、1907年、京都帝国大学に日本最初の地理学講座が設けられ、小川琢治らによって大学における地理学が確立されたことを記している。同時に、小田内通敏など在野の地理学者が活躍し始めたことも、付記している。第3章アカデミー地理学の展開—学会を中心に繰り上げられる世界—には、最も多くのページが当てられ、大正末期から昭和初期の、すなわち戦前の地理学の発展が詳細に描かれている。この章で、地誌学、歴史地理学、政治地理学、経済地理学などの発展の経緯が平易な表現で展開され、それに貢献した学者の業績や人となり生き生きと描写されている。また、この章には、飯本信之、松井勇などお茶の水女子大学の前身、東京女子高等師範学校の教員達の活躍が紹介されている。第4章戦時期の地理学研究—地理学と戦争との関わり—の章においては、中国大陸の経営や地政学が中心的に論じられている。第5章戦後の地理学研究—戦中・戦後の変化と不変—は、第I部の終章であり、戦後の混乱とよいうような状況とその後が1950年代まで記されている。読み通してみると、わが国の地理学の、最初の60年間に示された発展の大きさに驚きを感じる。著者の的確な構成力と筆

力のゆえとも思えるが、先人達の意欲というか情熱というか、そこから生み出された成果に、頭が下がる思いがする。

第Ⅱ部は、第6章氷河論争、第7章砺波散村論争、第8章条里集落論争、第9章国府論争、第10章「景観」論争、第11章景観地理学論争、第12章地理学方法論論争、第13章地理区論争が、それぞれ独立した議論として提示されている。

本書には、浅井辰郎、飯本信之、能登志雄、松井勇、渡辺光、5人のお茶の水女子大関係教員の名が挙げられていて、業績を知ることができる。なかで飯本の業績が第3章と第4章を中心におおよそ以下のようにかなり詳しく紹介されている。

飯本は、当時日本ではあまり行われていなかった政治地理学の研究に着手し、その先進国であったドイツの学説に重点をおいて考究し、政治地理学を自然景域や文化景域と国家との相互依存関係にある学問と規定した。政治地理学を研究するなかで、当時ドイツその他ヨーロッパで発達し始めたゲオポリティク(Geopolitik)を「地政学」と訳し、国家の行動と地理空間との関係のあり方を歴史的考察を基に追求する発展途上の学問として、わが国に初めて紹介した。研究の成果は、「政治地理学」として東京女子高等師範学校教授に就任して間もない1929年に出版され、さらに1935年「政治地理学研究 上巻」、1937年「同 下巻」と充実した図書として世に出され、その言説は言論界で重視されるようになった。

日華事変が始まり、当時の支那や英米仏蘭など植民地宗主国諸国との関係が緊迫してくると、「大東亜共栄圏」構想が打ち出され、地政学が重要な学問と考えられるようになり、米倉仁郎や小牧実繁などが、関西において地政学の研究会を組織し、研究を行い、政策提言を行うようになった。東京においても、1941年、日本地政学協会が設立され、飯本は常務理事に就任した。会員は、地理学者、社会学者、歴史学者、ジャーナリスト、政治家、軍人と多岐にわたり160名に及び、機関紙「地政

学」が刊行された。

終戦後、京都帝国大学教授であった小牧実繁は職を辞し、山口高等商業学校教授であった米倉二郎は公職追放、すなわち罷免された。(飯本は、本書には書かれていないが、取り調べを受けたものの、幸い罪を問われることはなかった。このことは、佐藤由子お茶の水地理学会員(3回)が著した雑誌地理の記事(34-10)で述べられている。)

以上のように本書には、地理学の歴史の一端として、戦前の地政学の終始が、適切な分量で平易に記述されている。現在わが国は、国際社会の動きのなかで、その影響を受けることなく生きることにはできない。にも係わらず、わが国の地理学では、国際関係を研究の対象にした論文を見ることは困難である。外国の地誌や特定の産業の調査は行われても、ダイナミックな国際情勢は、ほとんど無視されている。外国で問題が発生し、報道で取り上げられたとき、地理学者がコメントすることは皆無といってよいほどである。戦争中の地政学の失敗を羹にこりて膺を吹くように、21世紀においても国際政治の地理学や地政学を忌避することは、現実の世界から遠ざかり、地理学が趣味や物知りの学問から脱皮することを難しくするように思われる。地政学というマスコミなどでも頻りに使用されている用語が、地理学者飯本信之の訳語であることが忘れられて久しい。地球温暖化や食料とエネルギー欠乏の問題が憂慮され、解決のため、国際社会を横断して、各分野の知識と技術が求められる時代である。地理学が、地政学研究を通じて貢献できる道は、ないのだろうか。

本書は、前述のように、地理学史を面白く読むための書であるが、それだけに止まらず、地理学のあり方を考えさせてくれる書といえそうである。

ちとせ・じゅいち

千寿計画研究室(都市・地方計画技術士事務所)

1991-1999 お茶の水女子大学に助教授、教授として勤務